

## 二荒山神社の夏越の祓い 茅の輪をくぐって疫病退散

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



祓い串を参拝者に配る



神職を先頭に茅の輪をくぐる

宇都宮二荒山神社では、毎年六月三十日の午後三時頃から夏越の祓いおよび茅の輪くぐりなど二連の行事が行われ多くの氏子でにぎわう。祓いは浄化の儀式として宮中や神社で日常的に行われるが、六月と十二月の晦日に行われる天下万民の罪穢を祓う儀式を大祓いという。大祓いは一年を一月から六月までと、七月から十二月までの二期に分けた古代の考え方の名残りといえる。このうち六月の祓いを夏越の祓いという。夏越の祓いは、季節の改まりに行われる祖霊の祭り(盆行事)に先立って祓い清めるものであり、一方、夏越とは「和し」に通じ、荒ぶる神である疫病神を和める意味でもあり、夏に流行る疫病から免れようとする儀式でもある。

夏越の祓いは、境内に神職と参拝者が整列、係の神職から全員に長さ二〇センチほどの茅の祓い串が手渡される。次に神職による祝詞奏上があり、その後全員が祓い串で身体を祓い清める。最後に祓った祓い串と当日参列できなかった人が事前に神社へ届けておいた形代を集め、改めて神職が祓い清める。ところで、形代は七センチ四方ほどの紙に人の形を描いたもので、自分の身体をなでて祓い清め、穢れを託すものである。二荒山神社では、祓った形代を以前は「形代流し」と称し、田川に持って行き流したものであるが、近年は境内でお焚き上げしている。

を有しているという信仰は、奈良時代に原本が書かれた「備後国風土記」の「蘇民将来」に見える。それによれば武塔神(牛頭天王・素戔嗚命)が旅の折、一夜の宿を求めたが裕福な弟巨目将来はそれを拒み、貧しい兄蘇民将来は宿を適供した。後に再びそこを通った武塔神は、兄とその娘らの腰に茅の輪をつけさせ、弟たちは宿を貸さなかったという理由で皆殺しにしてしまった。武塔神は「吾は速須佐雄神なり、後の世に疫病が流行ることがあれば、蘇民将来の子孫といつて、腰に茅の輪をつけると疫病から免れる」と教えたという。茅はチガヤやスキなどの総称という。茅は日当たりのよい新開地に真先に生え、すくすく伸びる。そうした茅の生命力に疫病を防ぐほどの呪力が宿ると感じたのであろう。

茅の輪くぐりは、神職を先頭に参拝者が「水無月の夏越の祓する人は千歳の命延ぶというなり」との歌を歌いながら三回くぐる。医学が未発達な時代、夏になると赤痢やコレラなどいわゆる疫病と呼ばれるものが流行り、命を落とすものが少なくなかった。こうした疫病は、武塔神などがもたらすものと恐れられ、ただひたすら神仏に疫病除けを祈ったものだった。医学が発達した現在、疫病はすっかり姿を消した。茅の輪くぐりは、今や神社の歳時記、風物詩となっている。